

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

0. 福永自身のコメント

No.	タイトル	資料	初出年/月	要旨
0	初出	福永武彦全集第6巻		初出「婦人之友」1959年7・8・9月号 単行 1.「廃市」初版。1960年7月新潮社刊。四六版、紙装、カバーつき、装幀岡本半三。本文241ページ。内容:「廃市」「沼」、「飛ぶ男」、「樹」、「風花」、「退屈な少年」、及び「後記」(著者)。 2.「廃市・飛ぶ男」新潮社文庫版に収む。1971年6月刊。
1	「廃市」エビグラフ (初出時にはなし)	「廃市」初版	1960年6月	—— さながら水に浮いた灰色の棺である。北原白秋「おもひで」序文 (文章全体) 静かな幾多の溝渠(ほりわり)はかうして昔のまゝの白壁に寂しく光り、たまたま芝居見の水路となり、蛇を弄(いじ)らせ、変化多き少年の秘密を育む。水路 柳河はさながら水に浮いた灰色の棺である。「わが生ひ立ち」(詩集「おもひで」序文) (「わが生ひ立ち」よりの引用) 私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠のほひには日に日に廃れてゆく古い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。 私が十六の時、沖の端に大火があった。さうしてなつかしい多くの酒倉も、あらゆる桶に新しい金いろの日本酒を満たしたまま真蒼に炎上した。 …昔ながらの廃れかけた舟舞台には桜の造花を隈なくかさし、欄干の三方に垂らした御簾は彩色も褪せはてたものではあるが、水天宮の祭日となれば粋な町内の若い衆が紺の半被に棹さゝれて、幕あひには笛や太鼓や三味線の囃子面白く、町を替えるたびに歌舞伎の芸題もと替えて、水路を上下すること三日三晩、見物は皆あちらこちらの溝渠から小舟に棹さして集まり、華やかに水郷の観を尽くして、別れるものゝ、何処かに頹廢の趣が見えて祭の済んだあとから夏の哀れは日に日に深くなる。
2	「廃市」 初版後記	福永武彦全集第6巻	1960年6月	(引用) 総題に「廃市」という耳馴れない題名を採用したのは出版社の希望によるものだが、この造語は恐らくダヌンツィオの作品La Citta mortaを森鷗外あたりが訳したのが初めなのだろうと思う。まだその出典を見出していない。僕は北原白秋の「おもひで」序文からこのこの言葉を借りて来たが、白秋がその郷里柳河を廃市と呼んだのに対して、僕の作品の舞台はまったく架空の場所である。そここのところが、同じロマネスクな発想でも白秋と僕とではまるで違うから、どうか nowhere として読んでいただきたい。
3	筑後柳河 一作者の言葉	「ミス」1963年8月	1963年	(引用) 「廃市」というのは雑誌に二回あるいは三回続きの予定で書き出した短篇で、九州の田舎の旧家を舞台に、なるべく抒情的な、分りやすい作品にするつもりでいました。ところで私の故郷は筑前の水城や太宰府に近いあたりですが、もう二十数年も九州へは帰ったことがありません。ただ念頭にはいつも去来していましたから、この旧家の舞台に筑後柳河を想定しました。この柳河というところには、これまた行ったことのないのですが、これは北原白秋の故郷ですし、『水の構図』と題された柳河写真集は白秋の詩集とともに私の好きな本の一冊です。
4	取材旅行	「文学界」1965年2月号 随筆集「枕頭の書」(1971)収録	1965年2月	(引用) 私は生来おっくうがりで、容易に腰が上らない方だが、楽屋をさらけ出すと、行かないで或る場所を書いた小説が幾つかある。例えば「廃市」というのは筑後柳河らしいところを舞台にしたが、早急に九州くんだりまで行く暇もなし金もなしで、柳河の白秋遺蹟を写した「水の構図」という写真集を丹念に見て、それに想像力を混えながら書いた。

No.	タイトル	資料	初出年/月	要旨
5	「死都ブリュージュ」を読む	「週刊読書人」1976年12月13日号 随筆集「秋風日記」(1978)収録	1976年11月	(引用) 私は「ブリュージュ」を読み返してみたいと時々思ったが、本が手に入らないのだからしかたがない。しかしローデンバッハが試みた方法だけは頭の中に残つてみたと見えて、「廢市」といふ小説を書く時に、ひよつとして似るようなことがあつては困るなど心配した覚えがある。しかしたとひ似なかつたとしても、題名がそつくり同じなのだからローデンバッハには借があると云はなければならない。 この小説の長所は、心理にもなければ筋書にもない。(略) これは、文章によつて喚起された一つの死んだ町が主役なので、人間たちが現実に演じるメロドラマではその香気が失せてしまふ。畢竟一人の詩人が、一生の間に一つだけ書いた傑作、とでも言ふべきものだらうか。
参考	「水の構図 —水郷柳河写真集—」	北原白秋・詩歌、田中善徳・写真 アルス 刊	1943年	北原白秋が詩歌を、田中善徳が写真を担当した水郷柳河のモノクローム写真で構成された詩集。白秋最後の著書となった。 (「はしがき」より引用) 夜ふけ定つて、遺書にも似たこのはしがきを書く。 水郷柳河こそは、我が生れの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母體である。この水の構圖この地相にして、はじめて我が體は生じ、我が風は成つた。

1. 発表時評

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	要旨
1	短篇集「廢市」書評	佐伯彰一	日本経済新聞 1960年8月1日 日本文学研究資料叢書 「大岡昇平・福永武彦」所収	1960年8月	(引用) 読み終わって内容を思い出そうとすると、作中人物も筋も淡く、とらえ難いけれど、全体に通ずる澄んだ叙情的なふんい気だけは、あざやかに快い後味をのこしている。(略) 物語全体が、「廢市」という一語が作者の心にかき立てた詩的な幻想ではなからうか。いかにも古風で、ロマンティックすぎる話だが「廢市」にまつわる、白屋夢に似た幻想として受け取ると、にわかに味わいが深まってくるだろう。
2	短篇集「廢市」書評	進藤純孝	信濃毎日新聞 1960年8月4日 日本文学研究資料叢書 「大岡昇平・福永武彦」所収	1960年8月	(引用) なぜ作者は、退屈と倦怠と無為があるばかりの、ただ減んでゆくしかない、退廃的な舞台を好んで描こうとするのか。「魂の真実」とは作者「後記」の言葉だが、その真実は、自分自身と、自分とは別なものと、二つの部分に引き裂かれている精神の真実をさすのであろう。(略) 作者の世界をみる目は、こうした自己疎外という、人間の永遠の運命にクギづけにされており、退廃の光線が、この目から限りなく放射されているようである。
3	短篇集「廢市」書評	庄野潤三	週刊読書人 1960年8月8日 日本文学研究資料叢書 「大岡昇平・福永武彦」所収	1960年8月	作者が自分の空想の中にある町とそこに逗留している若き日の「私」をなつかしんでいることが感じられる。こうした心の贅沢をたのしむ人も、だんだん居なくなることだろう。
4	短篇集「廢市」書評	本田顕彰	東京新聞夕刊 1960年8月10日 日本文学研究資料叢書 「大岡昇平・福永武彦」所収	1960年8月	「私」は真実から逃げたが、他の三人は真実のためにもがく。これこそ真実と思いつめるが、真実はその向こうにあるかも知れない。作者は、世の人たちが、安易に真実と決めてしまつて、ごまかして通るところのもの向こうに、真実の、いわば原型があることを見抜いて、それを追究する。 きちつと構成がととのい(というのはちゃんとした哲学があることだ)、少しも省かず、少しのぜい肉もなく、全体に見事な有機的統一がある。珠玉のようなとは常凡な形容だが、とにかくまれに見る傑作である。

2. 研究紀要、文芸誌、単行本、その他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	ノオトニ・《廃墟について》	大城信栄	立原道造ノオト 福永武彦ノオト 思潮社刊	1970年4月	11	(引用) 直之は結婚する前までは郁代を愛していたのだ。結婚後もなお。だが、郁代がひとたび自分の許を去るといやがおうでも安子への愛が頭をもたげはじめる。何よりも彼は廃市の住人たる自身に死ぬほどの倦怠を感じているのだから。それが無駄だ、とは知りつつも、そういうふうな安子の明るさは、彼に愛の対象として選ばせるのに充分だ。 もはや、意にそまぬ一時の気休めで自身をごまかしつつ、日々の流れを果てのない退屈として諦め尽くしたとき、無意味な死を、あたかも自然死みたいな容易さで実行する。疲れた、という彼の遺書はそのまま本心なのだ。人生をあまりに早く見尽くしてしまった人間の不幸、そういったものがあるものだ。廃市に住む貴公子には、それが精一杯の人生だったかもしれない。
2	「廃市・飛ぶ男」(新潮文庫)解説	清水徹	新潮文庫	1971年6月	8	(引用) 「廃市」は直之と郁代、安子の姉妹とがつくりだす謎めいた悲劇的(愛の)三角形を、語り手「僕」がどのように発見し、推理していったかという物語である。 この作品において舞台となった運河の町の果たす役割が、三つの層において示されている。第一は「手のつけようがないほど衰微した」ロマネスクな町。第二は死の町(La Citta morta)、第三はどこにもないようなところ(nowhere)、つまりただ文学の中にしかない非現実な町。 挫折した芸術家の仮装された姿にほかならぬ直之は、「存在の喪失感」を抱いたまま、この廃市の中で「時間を使い果たし」そして死ぬ。その悲劇が「廃市」の三つの層とからみ合い、こだまし合い、溶け合っているところにこの小説の魅力があるのだ。作中人物と彼を包む空間とのこのような融合が、このあまりにもロマネスクな物語を美しい均衡に引きとめていると言ってもいいだろう。
3	福永武彦『廃市』における「愛と孤独」の四重構造 —プロット分析を中心に—	浅井美貴子他	国語表現研究 第1巻	1972年3月	6	郁代、安子、直之、僕の四人による場面と人物の四重構造から成る「廃市」における愛と孤独のありようを検討している。 (引用) 僕という人物は、単なる傍観者ではなく、『廃市』の中心思想である愛と孤独に関わって、四重構造の一部をなしている。(中略)四重構造を持つこの作品の解釈としては、「直之と僕」つまり「廃市内と廃市外との両面」を対照させてとらえる本田顕彰氏のとらえかたが、最も適切ではなからうか。
4	「廃市」の愛の構図	首藤基澄	方位 第1巻	1980年9月	7	北原白秋が郷里柳河をうたった「思ひ出」の詩集としては異例の長い序文「わが生ひ立ち」と対比させながら「廃市」を検討するとともに、「廃市」の愛が「三角形構図」に収まらない要因として直之の生に決定的にかかわった秀の存在を挙げている。 (引用) 郁代、直之、安子、そして「僕」と、ある思いこみで、不可能な愛のうたを奏でることになっているが、これは福永の多くの作品に見られる意識の流れによる愛の試みと同様に考えてよく、内部の豊穡は意識の傲りに支えられているといえないこともない。そこで一際異彩を放つのが秀の愛で、「暫くでもこうしてお側にいらればそれでいいんです。」という言葉は、意識に拘束されない現実的な生の主張と解される。その愛に包まれて、直之は福永の作品ではほとんど唯一といっていいデカダンスを味わう。直之と秀の心中は魂の避難所としての無私な愛を支えにしたデカダンスの極地で、憑かれていない現実的な愛が彼岸に直通していることを示唆している。

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
5	作品論「廃市」	木谷喜美枝	解釈と鑑賞 第47巻10号	1982年9月	5	登場人物たちが「所有」の意志を放棄した人々であることの指摘、さらに源氏物語の宇治十帖との酷似を指摘している。 (引用) 八の宮がその身の零落を恥じて、すでに死んだ気になって山ごもりし、果てははかなく逝ってしまったことによって、母を失っていた姉妹が後だてをなくしたこと、「廃市」の主人公たちの旧家の孤児という身の上。大君が妹の不幸を案じて、心痛のあまり亡くなること、姉の郁代が寺の一室に逃げこみ、安子たちの視界から隠れてしまうこと。後に登場する浮舟と秀。そして、「廃市」を象徴する川は宇治川と重なり、舞台は都から遠く離れ、栄えるべくもない宇治と「灰色の棺」をおもわせる廃市。 ——これらは奇妙に対応する。滅びゆくものは、なぜか懐かしく、美しい。このきわめて日本的な美意識。福永は、はからずも、日本の伝統的なはかなさの世界、そしてその実感としての無常の世界を、「廃市」の上に再構築したといつてよいのではないだろうか。
6	水の構図・意識の構図 —『廃市』の周辺—	中島国彦	高原文庫 第2巻	1987年7月	8	福永が「廃市」執筆の際に参考とした柳河の写真集「水の構図」(資料0-2、0-3)について、福永は写真を下敷きに町の情景描写を工夫した形跡はないが、大判のモノクロ画面が醸し出す夢幻的な印象を福永は好んだのではないかと述べている。 運河のイメージについて、「人工的な」運河を作品世界に幻想的に描き込むことにより、福永は人物ではなく「廃市」そのものを主人公として『廃市』の世界を形象化しようとしたのではないかと述べている。
7	「廃市」の世界	古関彰	方位 第12巻	1989年3月	12	『愛の試み愛の終り』を援用しつつ福永固有な孤独と愛の認識を手がかりに「廃市」を検討している。 (引用) 「廃市」の核心は、人物造形のありかたから言っても直之と安子の側に置かれていたとみなせるはずで、福永は直之と安子を暗示的に(という意味は、謎の重層性の中にふたりを置き去りにすること)描くことで人生の不可思議さを「僕」に目撃させようとしたのであった。そしてこの計算は、これまで分析してきた過程から判断しても成功したと言つてよいであろう。直之の郁代と秀に対する愛の構図が分明であればあるだけ、直之と安子の人生の間は浮き立つことになり、恋愛の謎を通して人生の謎を解く「廃市」のメイン・テーマが定立されることとなったからである。
8	日ごとの美女(LES BELLES DU JOUR) 「廃市」小考 I	井手香里	福永武彦研究 創刊号	1996年8月	5	「廃市」に登場する女性たち(安子、郁代、秀)に対する「僕」の思いを「美」を主体に検討している。 (引用) かつて亀井勝一郎は「愛とは隠れた美を発見する能力」であり、「美人とは、恋愛によって発見された個性美と言ってよからう」と「美」の「発見」のよこびを語った。(略) いうなれば「僕」は姉の美を客観上の問題とし、主観的な問題では愛の表現として妹に発見の美を認めたのである。
9	「廃市」論 —錯綜ゆえに読みの更新を迫る物語	河野基樹	文藝空間 第10号	1996年8月	8	「廃市」を<愛の三角形>(清水徹)だけではなく、福永の小説の方法論から読み解こうとした論考 (引用) 「廃市」が、読者の関心を読後に至つてなお引きつけておけるのは、物語の内容に増して、そこで駆使される(方法)にあずかっているとされる。もっとも、読者の知りたいことの解明を、最後まで後回しにするという「廃市」中の(方法)は「典型的謎解きの手法であり、とりたてて特異なものではない。しかし、「廃市」におけるその(方法)が破格なのは、最後まで謎解きがないというところである。これはこれで、一つの方法である。 互いに矛盾する諸言説を散りばめ、作品内容を錯綜させ、随所に設けられた空白によって作品解読に重層的非決定を生じさせる「廃市」の(方法)は、結局「如何に読者を道に迷わせるか」(1)という福永の意図に基づいたものだったのではないかと。 (1)「建築としての小説」(朝日新聞 1968)より
10	『廃市』試解 —小説の中の廃墟・あるいは廃墟としての小説—	西原千博	札幌国語研究 第2巻	1997年5月	19	「廃市」のストーリーを追いつながら舞台である廃市という物語空間と恋愛ドラマについて検討している。 (引用) この小説は「僕」の視点から語られた一人称小説であり、この「僕」の考えが必ずしも絶対的な真実ということにはならない。読者はこの言葉を信じてよいし、それでもやはり、「直之」は「郁代」こそを愛していたと思つてもよいだろうし、「秀」こそが一番愛されていたと思つたとしてもかまわないのである。むしろ、先に述べたように読者がそのように考え、物語りに参加することをこそ求めているのではないだろうか。

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
11	「廃市」試論	上村周平	福永武彦研究 第4号	1999年3月	4	(引用) 廃市という小説の舞台は、小説「廃市」のすべてに渡っている。古い家屋が立ち並び「非生産的」で生氣のない町の雰囲気は、そのまま町の住人たちの心情に通じ、縦横にめぐらされた掘割は美しい町並みを構成しながら、裏で頹廢的で複雑な人間関係を通じてさせてもいる。さらにそこで流れる時間は、根源的な時間となって、そこに住む人々だけでなく、十年前を想起する「僕」自身の意識をも支配しているのである。これは「僕」が一連の出来事を継起的に、滅びの方向に語っていったという「廃市」の物語の語り方も決定づけている。
12	陰画としてのテキスト — 福永武彦「廃市」試論 —	安達原達晴	近代文学注釈と批評 第7巻	2009年3月	10	(要約) 本稿の目的は、まず、郁代・直之・安子それぞれの発話内容およびそれら相互の照応関係を検討し、郁代と直之夫婦の断絶の実態を明らかにすること、ふたつめの目的は、「廃市」が複数のレベルで(閉じられたテキスト)であることを示し、発表年周辺の時代性との関係を素描すること。「ロマネスク」「幻想」「抒情」といった言葉が相応しい、観念的ともいえる「廃市」の世界は、実はテキストが生まれた時代状況との思いがけないほど先鋭的な対比を浮かべていると考えられる。「廃市」(=「灰色の棺」)というテキストは、高度成長期の日本社会が産み落とした一つの陰画としての側面を秘めているのではないか。
13	福永武彦『廃市』論 — <異界>と<待つ女> —	須藤武司	湘南文学 第43巻	2009年3月	11	語り手AIにとって、時の流れが停滞し、倦怠・無為・絶望が支配する、死の色が濃厚なこの空間は<異界>とも言い表されるべき場所であり、<異界>に他者が訪れる図式を夢幻能に当てはめ、Aをワキ、郁代をシテ、安子をつレと位置づけ、検討している。 (引用) 『廃市』の空間を<nowhere>とする福永の設定を軸にした時、『廃市』の物語世界は<異界>とも言うべき要素を際立たせる。その<異界>で繰り広げられるのは抑圧の下、偶然や必然の結末を望むがために<待つ>女を中心とした情念の物語であった。(中略) 此岸に生きる者が目にする彼岸の出来事は、人間の情念を抑圧した限界状況であり、そのあまりの重さに耐えきれず此岸の他者を招き寄せる。夢幻能がその作能におきて、偶然性を装ったワキの登場こそ実はシテが望んでいたことであったという構図がここで活かされている。
14	福永武彦「廃市」論 — 想起される<現在> —	稲垣裕子	阪大近代文学研究 第7巻	2009年3月	19	ベルギーの詩人ローデンバッハ作の小説「死都ブリュージュ」を視野に置き、福永が「廃市」で試みた、想起される記憶と時間の関係について考察している。 (引用) 明治期にローデンバッハがもたらした、「死都ブリュージュ」を原形とする水の町=<廃市>という像は、荷風や白秋による西洋的イメージに根差した文学的背景を経て、福永へと受け継がれ、日本的風土の中で現代のブリュージュとして新生したのであった。 亡き妻をめぐる夫の行動に見られる類似性に着目すると、福永の「河」は「廃市」以前に書かれた、早い段階での「死都ブリュージュ」受容の現れの一つとして考えられる。 いつしか封印されてしまった記憶の意味を問い直し、想起される過去と往還する<現在>を作中人物に見出させることが、回想の目的であったと思われる。この点において、福永作品に窺える回想形式という手法は、全面的に過去に従属される逃避としてあるのではなく、現在時間に対する抗いであり、流動的かつ自発的な機能を発揮する物語り行為であった。

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
15	墓のある町 —福永武彦「廃市」論—	西田一豊	近代文学研究 第26巻	2009年4月	15	<p>(引用)</p> <p>福永にとって故郷の水城とは、母親の墓のある土地として記憶されている場所なのである。またかつては確かにあった母の墓は、いまはどこにもない(nowhere)という『幼年』での福永の記述と、「僕」の記憶の中に存在する「廃市」とはパラレルである。という以上に、「廃市」には今はない母の墓が歴然と書き込まれてはいないか。それは小説「廃市」に書かれた人間心理の謎とは別の謎の一つであろう「母のお墓参り」の箇所(全集第6巻p138)である。</p> <p>(中略)</p> <p>また「廃市」は「母」の「死」にあまりに染められてはいないか。「僕」が立ち会うのは「母親」の法要であり、直之にとって「母」のような女性「秀」も直之と心中してしまう。それは母子中心に見立てることもできるだろう。加えて直之と秀が「水神様のお祭」の舟舞台で演じる「弁慶上使」もこうした「廃市」の「母」をめぐるモチーフの一つに数えられるかもしれない。「弁慶上使」では母子の別れという子別れの場面が演じられるのである。</p> <p>以上のことより「廃市」という町は何れもあれ母の眠る場所であり、そこには福永の故郷水城にある母の墓への思いが密かに流し込まれていると考えられる。それが白秋の「わが生ひ立ち」をエピグラフに引いた理由であり、福永は同じ九州福岡の柳河を舞台とした『おもひで』に自らのそれを重ねたのである。無論、それならば柳河そのものが舞台となってしまうが、福永の郷里は柳河ではない。ましてや福永の思い出を支えていた母親の墓のあった場所は今は既にどこにもないのである。それゆえ「廃市」は、とりあえずの舞台モデルとして柳河を取りながらも、そこは「nowhere」な場所として福永に了解され、また読者にも要請されたのである。</p> <p>「廃市」は典型的といつてよいような「異界訪問譚」であった。ここで言う「異界訪問譚」とは、まず語り手なり主人公なりが異界との接触を果たし、日常と異なる異世界へと導かれる、そしてそこは多くの場合理想郷であると共に時間感覚が溶解した世界であり、語り手なり主人公から出ると二度とその土地を踏むことができない、といったものである。「廃市」はそうした物語としての微がいくつも散見される。</p> <p>白秋から引用したエピグラフは、死んだ人たちの町であるという比喩となっているが、そこに「母の」という限定を加えるならば、後年福永が考えた「妣の国」と近いものになりはしないだろうか。すなわち架空の土地に今はない母の痕跡＝墓をテキストに印しづけたという意味で、「廃市」は福永のテキスト群で小さくない位置を占めると思われるのである。</p>
16	福永武彦「廃市」論 —<真珠化>による 福永の転換	酒井進	学芸国語国文学 第43巻	2011年3月	12	<p>過ぎたものを美によって価値づけようとする<真珠化>とは、虚像でしかないものを愛おしむものであるのだ。</p> <p>「廃市」は幾重にも重なる喪失感と、その喪失自体を美によって価値づける姿勢を描いた物語だということができるだろう。「廃市」における<真珠化>と、同時代の人々の故郷の喪失による<真珠化>が似通うのは偶然かもしれないが、時代の雰囲気と共鳴し合ったことは確かなのだ。「廃市」の魅力は、この時代と共鳴するかのような喪失自体を美しく描くことによる儚さにあるということができるだろう。</p>

3. 映画「廃市」(1983)関連

No.	タイトル				
0	映画「廃市」概要 (wikipediaによる)	配給:ATG 公開:1983年12月21日 上映時間:105分 原作:福永武彦 プロデューサー:森岡道夫、多賀祥介 企画・監督・編集・作曲:大林宣彦 脚本:内藤誠、桂千穂 撮影:阪本善尚 編曲:宮崎尚志 美術:薩谷和夫 (キャスト) 貝原安子:小林聡美 江口:山下規介 貝原郁代:根岸季衣 貝原直之:峰岸徹 秀:入江若葉 三郎:尾美としのり 大黒:花柳美女月 お手伝い:竹口恵津子 謎の客:高林陽一 弁慶:林成年 貝原志乃:入江たか子 映画『廃市』は、福永作品の初めての映画化であった。監督を務めた大林宣彦は、この20年以上前から福永作品を映画化したいと考えていたが、『廃市』は「一見、非常に映像的で抒情的な小説なんだけど、実は福永文学は言語の想像力であって、全く映像的ではないんですよね。福永さん自身、若い頃に映像評論をやったりして映画の大好きな人だから、その辺の秘密をよく知って、ずっと映像化を拒否していた」という。そのため映画化に当たっては、後述の16mmフィルムの採用など、周到な準備が行われた。			
No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	要旨
1	『廃市』 —小説のイメージの 映像化の試み—	衛藤賢史	別府大学紀要 第35巻	1994年1月	福永作品として初めての映画化となった大林宣彦監督による映画「廃市」(1983)についての分析。 16mmで撮影された映画は、全体が105分、93シーンから成る。10シーンのナレーションに「廃市」本文中の文章をそのまま転用している。 論考末に、ナレーションに使われた文章、93シーンの割り表(シーンタイトル、ショット数、シーン時間、備考)が付けられている。 「キネマ旬報」選出1984年ベスト10の9位にランクされた。 (引用) 話が小説にほぼ忠実に進行していようと、テーマを原作から掬い上げようと、大林氏が桂氏と内藤氏にシナリオの協力を得て視覚化された映像の世界は、大林氏が「・・・言語の想像力の世界であって全く映像的でない・・・」という福永氏の文学から触発された大林個人の内なるイメージの具現化であると考えてもいい。そのことは、映画『廃市』が単に小説を忠実に踏襲したコピーではなく、原作と等距離に置いて評価される独立した作品として、論じられる価値を有していることを示していると考えてもいいのではなかろうか。
2	にがい煙草 —大林宣彦監督「廃市」—	井手香里	福永武彦研究 第2号	1997年3月	映画「廃市」(1984)に登場した印象的な小道具として、主人公(小説の「僕」)の江口(山下規介)が吸う煙草(ハイライトとゴールデンバット)に着目した考察。
3	僕の映画づくり	大林宣彦	僕の映画人生 実業之日本社刊	2008年10月	(引用) 「時をかける少女」を撮ったあと、ぼくの個人的な思いをより追究したくなって撮ったのが「廃市」です。 僕は福永さんの小説が18歳のころから大好きで、いつか描きたいと思っていて、まず『廃市』を16ミリフィルムでプライベートに小さく撮ってみよう決めました。福永さんの第1回作品ができるということで、35ミリでうちのお正月映画にしてくださいという話は映画各社からずいぶんありましたが、それはお断りして、これはぼくの個人的な映画だから、夏休みの2週間だけこの映画のために好きな仲間と集まってつくことにしました。 『廃市』は美しい姉と快活な妹を同時に愛してしまう主人公の話で姉を根岸季衣、妹を小林聡美が演じました。 根岸季衣さんがやったおねえちゃんの役は、原作ではろうたけた美女です。根岸さんはぼくにとっては美しい人だと思っけれども、女優さんの柄からいうと、そういう絶世の美女を演じるキャスティングの似合う人ではないので、周りが「大林さん、何を考えているの」と言っただらいいでした。そのときの根岸さんが偉かったのは、体重を10キロぐらい落として参加してくれたことです。
4	『廃市』	大林宣彦	A MOVIE 大林宣彦、全自作を語る 立東舎刊	2020年10月	(インタビューに答えて) 福永さんは当然標準語で書かれているけれど、映画にすると風景も映る。風景はまた文学とは違う力を持つから、それならば風景の属性である、街の暮らしの方言を使うことにしました。 福永武彦の最初の映画化だということで、映画会社の各社からオーダーが来たんですよ。岩下志麻ちゃんを使って、というような(笑)。それでは福永さんのお嫌いなテレビ映画、文芸映画になってしまう。これは純文学映画である、という僕のセオリーがあったので、商業映画にふさわしい35ミリでは撮らない。むしろ8ミリでもいいくらいにだけど、それでは僕のファンに応えることがもうできなかったの、じゃあ16ミリでやろうと。

